モンゴル海外研修渡航記

小　林　裕　貴　　今　泉　和　也

去る平成23年９月14～19日まで，本学柔道整復学科の７名の教員と11名の有志学生でモンゴルへ海外研修に旅立った．モンゴルでは現在，日本の柔道整復師が柔道整復の技術を普及し，それを学んだ者により発展しつつあることから，今回の海外研修の地として選ばれた．

私たちは，各々集合場所の成田空港へ到着し，チェックイン カウンターを探すと一番端であった．これはモンゴルに行く人が少ないことを意味しているのか．更に私たちが乗る飛行機はモンゴルの国営MIATモンゴル航空であったが，落ちる確率ワースト２との情報を小耳に挟んでいたこともあり，いきなり不安だらけの出発となった．いざ飛行機へと乗り込んだが，飛行機のスピードが速くなるにつれガタガタという音が増し，窓から翼を見ていると今にも部品の１部が飛んでしまいそうな揺れを感じた．しかし，飛行機はそんな私たちの不安を気にすることもなく，大空へと飛び立った．

約５時間を掛け到着したモンゴル・ウランバートル．最初に感じたことは「寒い」であった．日本は，まだまだ残暑が厳しかったため，スーツを着て飛行機に乗るだけで汗をかいていた．それがモンゴルではなんと６℃．さすがに，この寒さに耐える衣服は誰も持っていなかった．そして，空港に迎えに来ていたバスに乗り込み，ホテルへと向かった．空港付近は田舎なのか一本道で，周りはほとんど山だった．道路はというと舗装されていないアスファルト，上下・左右の振動を感じながらの走行中，窓から外を見ると道路沿いに沢山の牛がいるのだ，これには驚いた．さらに，モンゴル慣れをしている久米先生に，その牛が野良牛だと聞きさらに驚いた．

ウランバートルの中心地に入るとそこはもう大都会で，ひどい交通渋滞が続いた．交通マナーは日本では考えられないもので，２車線の道に４台の車が併走して更なる渋滞を起こしているため，右折も左折も全くできないのだ．クラクションが絶えず鳴り響いている．まさに，「何でもあり」であった．これには牛が車のすぐ横を歩いている驚きをはるかに超え，言葉にならなかった．きっと，モンゴル人が日本に来たら，車の運転はできないだろう．逆に日本人がモンゴルで運転することも難しいであろう．このショッキングな体験を経て，すいていれば20分の道のりを１時間以上かけて私たちは無事ホテルへと到着した．到着して部屋に荷物を置き，すぐにホテルで夕食をとった．モンゴルの食事に不安と期待を膨らませ，出てきた料理は意外にも美味しいものもあり，さすがレベルの高いホテルと感じた．ただ，味が全くしない料理も多く，ドレッシングや味付けのできる何かがあれば尚良かった．参加者の中では，モンゴルの主食である羊の肉で，得意不得意がはっきりと分かれていた．

部屋に戻りテレビをつけると，ほとんど映らないが199チャンネルのケーブルテレビで，驚くことに日本のJリーグが放送されていた．実況・解説はもちろんモンゴル語だが，日本のアニメも放送されていて，モンゴルにいながらも日本を感じることができ，嬉しかった．ホテルの部屋はとても綺麗に掃除されていたが，エアコンのある部屋とない部屋があり，部屋の中で震えている人もいた．シャワーは，水しか出ないとの話を聞いていたが，私の部屋は熱湯しか出ない時間帯もあり，熱くて辛い思いをした．

翌日，私たちはTHE 5th INTERNATIONAL SYMPOSIUM on present situation and future development of Mongolian traditional medicine という学会に参加するため，会場のチンギスハーンホテルへと向かった．そこは，すごく立派なホテルでモンゴルを代表する５つ星ホテルだと後に知った（図１）．会場の入口前エントランスには東京有明医療大学の先生たちの研究ポスターが掲示され，とても格好良かった．また，柚木先生と久米先生が英語での口頭発表に果敢に挑んでおり，その姿はさらに格好良く誇らしかった．全ての発表が英語であったため，私たち学生は正直わからないことだらけであった．しかし，将来，海外に活躍の場を広げていきたいなら，英語が話せることは絶対条件だと痛感した．２日目の学会が終了しホテルへと戻り，その後，ホテル近くのコンビニに夜の飲み物などを購入するため中に入

図１　学会会場のチンギスハーンホテル

東京有明医療大学保健医療学部柔道整復学科３年生

ると，日本では考えられない光景を目の当たりにした．なんと食材と一緒に平然と並べられた豚の顔，さすがにもう笑うしかなかった．

３日目，ハード スケジュールだ．午前中は国立外傷病院の見学．午後は国立モンゴル健康科学大学へ行き，モンゴルの学生たちとの交流．次に昨日の学会の表彰式に参加し，さらにモンゴルの歴史あるラマ教寺院の見学，最後は学会参加者の晩餐会．

図２　国立外傷病院

図３　国立モンゴル健康科学大学での学生交流の場

外傷病院では，日本で柔道整復師が経験することが少なくなった骨折の患者だけで300人以上の入院患者がいて，日本では経験したことがない治療方法や稀な骨折患者も病棟で見学することができ，今後の良い経験となった（図２）．国立モンゴル健康科学大学では，学内を見学してからモンゴルの学生と交流することになった．施設は大学の先生が案内してくれたのだが，先生の中には日本語を話す先生もいて，英語も話していたので最低でも３ヶ国語は話せるのであろう．モンゴルで日本語がこれほどまで浸透しているとは考えもしなかった．モンゴルの先生のレベルの高さを実感した．

学生交流の場では，先輩たちが「発育期の腰痛分離症」に関する発表を行い，モンゴルの学生の前で緊張しながらも，さすが先輩！という発表であった．モンゴルの学生の反応は，時々笑いも起きたが真剣に発表を聞きメモを取っていた（図３）．私たちのクラスで考えると，あそこまで集中力は持たないなと感じた．モンゴルの学生たちとの別れを惜しみつつ，表彰式の会場チンギスハーンホテルに着くと，発表した先生だけでなく参加者の私たち学生まで参加証をいただいた．立派なものであったため，家で大事に保管している．

晩餐会までの道のり，道路沿いに牛の糞がいくつも散らばり，それは日本では想像ができないくらい大きく，バスの中では疲れも忘れて盛り上がった．会場に着くと豪華な夕食が用意され，モンゴルの伝統的な演奏や歌が披露された．モンゴルの文化に触れることができ，とても充実した時間を過ごした．長い１日が終わったが，先輩たちがこの後，発表会の反省会をしようと誘ってくれたので参加した．正直，あまり話したことがない先輩たちであったが，そこは楽しい時間で私たち後輩は先輩たちとの心の距離を縮めることができ，翌日からより自然に接することができた．反省会に誘っていただいたことを本当に感謝している．

モンゴルでの研修がスタートし，慣れない食事や生活にも少しだけ体が慣れてきた４日目の朝，２名の先生を除き全員がひどい下痢に苦しんだ．モンゴルの大自然や文化，歴史を堪能しようと，ウランバートルから離れた地方へとバスで向かった．初めは驚いていた車の交通事情にも慣れ，快適な運転で都会を少し離れると，そこにはモンゴルの大空と大自然が広がっていく．野生の牛や羊，どこまでも続く河や草原，景色がどんどんとモンゴルを感じさせ，爽快であった．バスが突然停まり，私たちは鷹と鷲を手に乗せた．間近で見ると想像以上に迫力があり逞しく，しかしどこか繊細さを感じさせる美しい生き物である．空を舞い一直線に自分の手の上に向かって飛んでくる姿は圧巻であった．さらにバスで20分程移動すると，チンギスハーンの巨大な像が見えてきた（図４）．遠目から見ても十分大きいが，近づいて見上げると，ただただ凄いの一言だった．像の中は見学できるようになっており，チンギスハーンの歴史にまつわる展示品なども公開していた．階段を最上階まで昇ると，馬にまたがるチンギスハーンの頭の上に辿り着いた．外の風を受け，そこから見渡す景色は一層モンゴルの大自然や壮大さを感じさせた．外には移動式住居ゲルがあちこちに点在し，先生の誘導でゲルの中まで見学させていただいた（図５）．中は広く，天井も高かった．ゆったりと横になれるベッドが３つもあり，防寒もしっかりしていて快適な空間だった．さらにバスは移動を続ける．途中，旅の安全を祈願し，全く飽きないこの壮大な景色をひたすら眺めた．地方での昼食は独特で，それを食すのに苦労している人が何人もいた．地方を後にする前，地面に刺さった，木の棒を見つけた．近づいて見てみると，日本語で，"世界人類が平和でありますように"と書かれていた．これは，何故ここに作られ，日本語で書かれているのか．年配者にはモンゴルでの歴史的背景に日本を良く思わない方もいるようだが，こんな地方に，世界平和を願った想い，しかも，日本語で書かれていることを私たちは考えさせ

図４　巨大なチンギスハーン像

図５　ゲル

図6　初めての乗馬体験

られた．空を見上げ，この想いが，世界中に伝わりますようにと，小さな私の願いを込めてお祈りをした．その後，ほとんどの人が初めての乗馬体験をした（図6）．この色の馬が良い，早く乗りたいと高揚感を抑えきれず，乗ってみるとなかなかの高さがあり，普段見ることのできない景色や感覚に，興奮したことを今でも良く覚えている．夕空の下，学生どうしで競争したり，ゆっくり上下に揺れる感覚を体で感じながら，私たちは大いに楽しんだ．地方の研修が終了し，ホテルに向けて帰路についた．今日の体験の興奮がおさまらないまま，会話と合唱でバスの中はまるで動物園のようであったが，しばらくすると，その賑やかな声はだんだんと消え，皆眠りについた．静かになったバスはモンゴルの夕日を浴びながら，その景色をオレンジ色へと変化させ，果てしなく続く一本道を駆け抜けた．ホテルに到着し，モンゴルの先生と元気な学生数名でモンゴルのパーティーに参加させていただいた．モンゴルの大学で知り合った学生も参加し，研修ばかりでなく息抜きすることも大切と，楽しい晩餐となった．

いよいよ5日目，モンゴルでの最終日がやってきた．この日は買い物をしてから，モンゴルの国技モンゴル相撲の観戦をした（図7）．モンゴル相撲の大会が行われているスタジアムへ到着すると沢山の観客，それ以上に驚いたことは選手の多さである．様々な色のユニフォームで，目をギラギラと光らせ，闘争心を体中から放っていた．選手と記念撮影を行い，選手の身体も間近で見ることができた．その身体は無駄なく絞られ，高齢の選手でも鍛え上げられた身体であった．ホテルで休息をとり，最終日の夕食を参加者で楽しんだ．夕食はバイキングで，自分で選んだ好きな食材を，店員さんがパフォーマンスをしながら鉄板で焼き上げる．私たちはそのパフォーマンスを見て興奮し，声を出してその場を盛り上げていると，店員さんはどんどん大技を繰り出した．

図7　モンゴル相撲の会場

帰国する日は早朝4時にロビーに集合，荷造りをして眠る人もいれば，友達と語り明かす人もいた．私は友達と語り明かすことで，より一層友情が深まり，有意義な時間を過ごすことができた．朝4時，極寒の中，空港へと向かった．体調を崩す人，食事に苦労した人，苦い体験もあったが，それ以上の経験を得た．その私たちを乗せた飛行機は何事もなく予定通り日本に到着し，最後に先生方からの言葉をいただいて解散となった．

長いようで短かったモンゴル研修．この研修に参加した学生は，それぞれで感じたもの得たものは異なると思う．しかし，海外におけるコミュニケーション能力，初めての体験で学ぶことの積極性と貪欲さを持つことは，国が違っていても共通していると改めて感じた．さらに，今回の学会においての発表は，海外ならではの雰囲気があり，今後は医療を学ぶ者として積極的に参加しなければならない．そして，国立外傷病院などを見学して感じたことや，国立モンゴル健康科学大学の学生の意識の高さや医療に対する姿勢など，多くを学んだ5泊6日のモンゴル研修であった．この体験を通し発展途上国の医療の現状や，医療人となる私たちに求められていること，自分の将来がより明確になり，参加させていただいた私たち自身の人生に必ず活きてくるものと強く感じた．

最後に，このような機会を作っていただいた本学の先生方，様々な準備をして下さった国立モンゴル健康科学大学の先生方とこの時間を共にした先輩や後輩に，心から感謝の気持ちを伝えたい．また，このような機会があれば，是非参加したいし，同級生や後輩たちにも参加して欲しいと思う．これからの大学生活，今回学んだことを胸に刻み，国家試験の合格を目指したい．